

兵士は死なない!

この世界に戦争の続くかぎり
兵士たちは語りつづける
栄光について……
戦いについて……
死について……

米・国防総省の金庫に眠ること28年
いま初めてカラーで公開される
硫黄島攻防のすべて!

撮影 米海兵隊司令部
協力 米海軍省・国防総省
構成 須藤出穂
ナレーター 中西龍



IWO-JIMA



硫黄島

カラー作品
長篇記録映画
4チャンネル超ステレオ音響

NCC

ニューシネマ・コーポレーション(NCC)配給

硫黄島

カラー作品■長篇記録映画

4チャンネル超ステレオ音響

IWO-JIMA

解説

若い世代に戦争の真の姿を——映画「硫黄島」をすすめる 軍事評論家 小山内 宏

昭和45年2月19日、太平洋戦争最大の激戦地「硫黄島」で日米合同による戦死者慰霊祭が行なわれた。そして28年前のこの日攻略戦の火蓋が切られた。これを守る日本陸海軍2万1千名、攻撃する米海兵隊7万5千名、全長6キロ、全巾3キロ、この小さな島でくり広げられた凄惨な死闘で、日本軍2万、米軍2万9千の尊い戦死者を出した。

ウインストン・チャーチルはその第二次大戦回顧録にこの大戦最大の激戦地として、レニングラード、エルアラメン、そしてこの硫黄島攻防戦を挙げているが、「世界一番熱い場所」といわれたこの島も、28年後の今は、中部太平洋上の平和な一孤島にすぎない。

この映画は太平洋戦争において、日米両軍が国を賭けた硫黄島攻防戦の凄惨な全ぼうのすべを、米海兵隊第三司令部の勇敢な6人のカメラマンが戦史記録初のカラートで決死の撮影をした大記録映画である。

戦後、米軍の戦史記録として27年間未公開のまま米国防総省のペンタゴンに保管されていたが、平和になった日本の今日、この悲惨な生々しい大戦争の全貌を眼前にありのまま描きだし、さらに両軍ともに莫大な物資と人命の犠牲を払い、猛烈、かつ勇敢に戦いぬいた兵士たちに敬意を捧げ、この悲しい悪夢によって自由で平和な新しい日本が今日あることを忘れてはならない。

スタッフ

撮影 米・海兵隊第3司令部
カメラ マックロッシュ軍曹

A・S・トレジャー 伍長
ロフト中尉
マクダモット

協力 米・海軍省/国防総省
企画協力 緒方克行
編成 須藤出穂
編集 御法川清一

音楽 利根常昭
演奏 AMPオーケストラ
ハミング ジャック・ウィルソン

ナレーター 中西 龍
制作 NCC

硫黄島。高い空から見下せば、オタマジャクシのような形の小島である。

この、長さ約6キロ、最大巾3キロという小島が二万人以上の戦死者の血を吸い込んだ激闘の島として、太平洋戦争の歴史のなかに記されていることは、戦後二十数年の今日、日本人の間でも次第に忘れ去れようとしている。

その硫黄島の斗いとは何であつたか。それをドキュメンタリー映画「硫黄島」はわれわれに訴えるものなのだ。

この、アメリカ側の撮影した記録フィルムは、あの太平洋戦争当時のフィルム材料とは思えない鮮やかな色彩を表現して、鮮烈にあの戦争の姿をわたくしたちに見せてくれる。

整理された編集によつた無駄のない、そして克明な描写によるこの戦争記録映画は、硫黄島の戦斗というものを、そして戦争というものをこそこううつし出して

一九四五年二月一九日。

米軍は六万人の大兵力を、八〇〇隻の艦船とともに硫黄島に送り、強襲上陸作戦を行った。数万発の砲撃弾をうちこみ、島が砕けてしまふのではないかと思われたほど叩いておいてから、米軍の上陸部隊は海岸に殺到した。日本軍の上げい反撃が開始されて、硫黄島の海岸はおびただしい米軍将兵の血を吸いこむことになった。米軍の物量作戦を知りつくしていた硫黄島守備軍司令官の栗林中将は、二万人余の日本軍をすべて地下の洞窟陣地に立てこもらせ、米軍のすさまじい砲撃に耐えつつ、じつと米軍が上陸してくるのをまっていたのだ。

こうして硫黄島の海岸は、米軍をして「地獄の浜辺」とよばしめた凄惨な戦場と化していったのである。

この映画の最初のヤマは、このすさまじい海辺の戦斗状況である。つぎつぎと上陸用舟艇から吐き出されてくる海兵隊の兵士。だが彼らは砂の間にへばりついて一歩も前進できなないのだ。しかし、日本軍のすさまじい反撃のなかに三万人を上陸させる作戦計画は、冷酷に強行される。非情な戦争の姿は、波うち際に転がる米兵の戦死体に見せられてくる。

やがて、おびただしい流血を吸い込んだ浜辺は揚陸された兵器や器材や物資でいっぱいとなる。アメリカの物量作戦のさまを見るときに、戦争というものがいかに巨大な浪費というものであるかを感じさせられてくるのだ。

戦斗は進んでいく。米軍兵士は進みつつける。だが、敵である日本軍の姿はみえない。その見えざる敵と斗つて、つぎつぎと犠牲者がでていく。戦争が決して劇的なものでなく、陰惨なものであるかを見ることが出来るのだ。

見えない敵を倒すために、無残な焼打ちが火放射射機によって行われる。それはたた火をまきちらして焼きつけていくだけである。戦争などよべるものではなく、屠殺である。屠殺をいっそう効果的にするため、爆破が行われる。爆薬は片っぱしから洞窟を吹きとばし、埋めていく。軍用犬もあらわれて、けもの狩りのように日本兵を追い出すのだ。ここにはすでにベトナム戦争の原型の縮図がある。ベトナム戦争では、すべてを焼きつくすナバーム弾が大量につかわれているが、そのナバーム弾が実用化されてつつかい始められたのは、この硫黄島の戦場だった。

東京から南へ約一、二〇〇キロに位置した硫黄島は日本の首都の表門であり、アメリカはここにP51戦闘機の基地とB29爆撃機の中継基地をつくり、日本本土の空襲を強化して日本に止めを刺そうとしたのだ。日本はこの島で米軍の前進を少しでも喰い止めようとしたのだが、海軍も航空兵力もすでに劣勢となつていたとき、硫黄島の守備隊は少しでも米軍に損害を与えたあと、全滅するばかりでなかつたのだ。米軍は一週間あれば完全に占領できると考えていたのだが、日本軍の死にも狂いの抗戦はその三倍もの日数と二万数千人の死傷者を必要としたものになつたのである。

組織的な抵抗はついに終わった。降伏勧告の呼びかけに、洞窟から生きのこつた日本軍の軍人軍属が手をあげてはい出してくる。その顔には弱々しい微笑が浮んでいるが、生きのびた喜びの心は痛いほど伝ってくる。勇壮な戦死も、ハエのたかつている米軍の軍用犬の死体と同様なのだ。米兵は黙々と戦友の死体から認識標を集め埋葬していく。生き残つた兵士は戦死者の墓地をめぐる母国へ帰っていく。フィルムの画面は勝利の喜びよりも、戦いのあとの虚しさをいっばいにみせられている。

忘れ去られようとしている「戦争」の姿を、この記録映画は静かにしかも鮮明に見せ、戦争の果なきをつしりと教えてくれる。日本人は、いま一度、この硫黄島をふりかえらなければいけない。戦争を知らない若い世代はぜひとも一見してほしい映画である。

スーパー・シネラマチェーン

3月3日(土)よりロードショー

渋谷 パンテオン (407) 7219

新宿 ミラノ座 (202) 1189